



02 **特集** OG (本学現職教員) 鼎談

「奈良女らしさ」の伝統をふり返る～ OGとして、研究者として、教育者として～

06 教養広場

12 教養広場登場教員にゆかりのある 卒業生、在学生のみなさんより

13 研究の現場から最新情報をお届けします！

14 「21世紀に必要とされる教養」を育む学校です ～附属中等教育学校編～

15 なでしこ基金 / Campus Topics

16 あの頃の奈良女へタイムスリップ!! = 本学自慢の名物教授 第2回 水木 要太郎編 =



理学部 数物科学科 物理学コース
永廣 秀子 准教授

生活環境学部 住環境学科
瀬渡 章子 教授

文学部 人文社会学科 歴史学コース
西村 さとみ 准教授



Nagahiro Hideko

Seto Akiko

Nishimura Satomi

特集：OG（本学現職教員）鼎談

「奈良女らしさ」の伝統をふり返る

～OGとして、研究者として、教育者として～

奈良女子大学は2019年に創立百十周年を迎えます。本学のOGであり、現在は教員としても活躍する3名に、奈良女での学生生活から研究者になるまでの道のり、教員として日々感じていることを語ってもらいました。

（以後、名称について、瀬渡章子先生＝瀬渡、西村さとみ先生＝西村、永廣秀子先生＝永廣と表記）

奈良女子大での学びを選んだきっかけ

——奈良女子大に入学しようと考えたきっかけについて教えてください

永廣 大学では物理をやりたいと思っていました。自宅から通える関西で、物理学科がある大学となると選択肢はあまり多くはありません。自分の学力、通学できる地域であること、物理学科という条件にヒットし、当時はまったのが奈良女子大でした。奈良女の名前は、祖母が奈良女子大の前身である奈良女子高等師範学校に行きたかったのだという話を息子である父から聞いて印象に残っていました。祖母は当時の担任の先生から進学を勧められていたのですが、家庭の事情もあり叶いませんでした。「自分（祖母）は行けなかった、行けなかった」と繰り返し聞いていた父の中では、奈良女子大学は非常に思い入れが深かったのでしょうね。「奈良女に行ったらどうか」と言ってくれまして。父の中でも評価が高い大学で、祖母の願いも叶えられ、国立大学で物理も学べて、願ったり叶ったりでした。

西村 ご家族の奈良女への想いの強さを感じますね！私は日本の文化にずっと関心があったり、日本の中心が置かれた場所、歴史や文化について勉強できたかと思っていました。お寺や神社が近くにあり、博物館があるところで学びたかったので、奈良女に魅かれました。かつ重要なことだったんですけどね。当時は先生方は分厚い大学ノートを持っておられ、それを見ながら板書されたものを学生も書くというスタイルが多かったですね。今はPowerPointで作った資料を配って、重要どころだけ板書するというスタイルが主流でしょうか。分野によっても違いがあるかもしれませんが。

——友人関係やサークル活動はいかがでしたか

永廣 大学という個人がそれぞれに自分の分野を学んでいくものというイメージがありました。奈良女では高校時代より濃い人間関係が築けました。物理を学ぶには、前提となる知識を順を追って身につけていく必要があります。当時は物理学科でしたから（現在は数物科学科）、物理学科としての授業の選択の自由度はそれほど多くありませんでした。特に2回生以降は専門科目でずっと同じ部屋なので、3年間同じメンバーが同じ部屋で勉強するような感じでした。濃い人間関係と言っても女子校で想像されるような派閥ができるわけではなく、遊びにいくのはこのチーム、試験勉強はこのチームといったように、目的によって顔ぶれがなんとなく決まっていたんですね。あと、誰かが授業中に質問すると「私もわからない」「そこは違っていると思います」とみんなが言い出して、先生と議論になるのも面白かったです。教室に一体感がありましたね。積極的に質問して、わからないところを先生と共有する利点もあったと思います。今はあまり見られない光景かもしれません。

西村 文学部では、先生と直接議論することはあまりなかったかもしれませんが、そのか



永廣 秀子（ながひろ ひでこ）

2001年奈良女子大学大学院で博士（理学）を取得。大阪大学核物理研究センター特任研究員、同センター学振研究員を経て、2008年奈良女子大学理学部助教就任。2012年より同准教授。2017年より、奈良女では初めてとなるクロスアポイントメント制度を利用した大阪大学核物理研究センター特任准教授にも就任。専門はハドロン物理学理論。

瀬渡 歴史を学ぶなら、奈良という場所は魅力的ですね。西村先生は奈良女を知ったのは誰かに勧められて？

西村 いえ、進学を決めたあとに高校2年生だった時の担任の先生が奈良女出身と知ったくらいで（笑）。まったくの偶然でしたが、その先生はとても喜んでくださいましたね。

瀬渡 私は出身が奈良県なのですが、バスの本数も少ない山奥。高校の頃は下宿していましたが、大学は自宅から通える場所がいいと思って調べてみると奈良女がいいなと。高校には奈良女出身の先生もいらっしやいました。どっしりと構えて敵しさもある方です。

た。身近に奈良女出身者のモデルがあったことも決め手だったかもしれません。もともと生活科学に興味があったので、当時は新しい学科であった家政学部住居学科へ進学を決めました。家政学部の中でも特にユニークな学科で、建築家にもなれるというので、手に職をつけたいという思いもありましたね。

個人的な教員や学生に囲まれた学生時代

——学生時代の授業で印象に残っていることはありますか

永廣 印象に残っているのは、入学当初の演習の授業ですね。ある時、教室に入るとまだ先生が来ていないのに周りの学生がすごい勢いで回答を黒板に書き始めたんです。授業で先生に指名されてから回答を書くものだと思っていたので、その姿勢にはすごく背筋が伸びる思いがしました。ここまで積極的に行かないといけないのかと。

瀬渡 自主的に書くというスタイルは伝統的なものなんですか。

永廣 先生によってスタイルは違いますね。今思うと例外的なのかもしれないです。ただ、受動的ではないいけない、前のめりに自ら勉強しなくちゃと自覚を持って授業でした。

最初にこのようなインパクトのある体験ができたのは良かったと今なら思えます。

西村 前のめりと言え、当時の先生は自分が本当に面白いと思ったことを情熱を持って語られている方が多かったように思います。授業が始まるなり、熱く語り始めて、時間が進むにつれ次第に上着を脱ぎ、シャツをまくるといったような、その熱意に圧倒されていましたね。その当時はよくわからなくても、ここにはきっと大事なことがあるに違いないと思わせてくれました。

瀬渡 自由奔放で個性的な先生がたくさんいらっしやったように思います。特に一般教養の授業では、授業の補足の話の方が多くて、その内容が面白くてずっと記憶に残っていたり。もちろん、教えておられることは基本的



西村 さとみ(にしむら さとみ)

奈良女子大学大学院人間文化研究科修了、博士(文学)。奈良女子大学文学部助手、助教を経て2013年に同准教授。おもな著書は『平安京の空間と文学』(吉川弘文館)、『親信脚記』の研究(思文閣出版)など。専門は日本文化史。



瀨渡 章子(せと あきこ)

奈良女子大学生生活環境学部教授、学術博士。1977年奈良女子大学家政学部住居学科卒業。1979年奈良女子大学大学院家政学専攻科住居環境学専攻修了。修了後、本学教務補佐、助手、講師、助教授を経て2005年より同教授。専門は住居環境計画学。

わり、学生同士の意見交換は活発でした。
永廣 どの授業でもというわけではなく、先生がどんどん質問していいというスタンスの場合ですね。ところで、西村先生と瀨渡先生はサークルに所属されていたか。

西村 はい、器械体操のサークルに。初心者もOKののんびりしたサークルでしたので、必死に練習するというよりは、学部や学年も違う人たちと一緒に過ごすことが楽しかったです。2年生までは寮の4人部屋に住んでいて、全国から集まっている学生の間で交流があり、そこでできた友人の郷里に遊びに行ったりもしましたよ。3年生からは学科に所属し、それぞれ個人で決めたテーマで研究していきます。ですが、そこでお互いがバラバラになることなく同じ教室で頑張る友人たちを見て自分も頑張ろうと思えたり、研究内容に関して相談できたりしたのは、とてもよかったです。

研究者の公募があるか、あるいは自分自身のライフスタイルの変化の有無など、タイミングの良さも大きかったですね。
西村 タイミングは大事ですよ。私は卒論を書いている時に「この問題をもう少し追究したい」と考えるようになり、大学院に進学しました。その頃はまだ、大学院をでても研究職に就くことは考えられない時代だったので、学位を取得し研究生として奈良女で学び続けるうちに、前任の助手の方が転出され、就職することになりました。学務の事務が主だったとは言え、研究ができる環境に居られるのはありがたかったです。めぐり合わせですね。

瀨渡 私は4年生の夏休みまで大学院に行くことは考えていませんでした。夏休みにアルバイトで都市計画のコンサルタント事務所に行ってみて、そこでの仕事がとても面白かったんですね。こんな仕事もあるんだと興味を持って

瀨渡 私は入学当初ユースホステルクラブに入部しました。旅行してユースホステルに泊まり歩くというのですが、自分たちで計画を立てていくのは楽しかったですね。それだけでは飽き足らず、先輩に誘われて民家の調査をしたり、関西の8大学でつくる建築系学生連絡会議という団体に所属し、サマーセミナーや講演会を開催したりしました。入学した当初は一般教養の科目が多く、自主的に専門の勉強をしたかったです。学内では住居研究会というサークルを組織して住居の学習や見学会を行いました。私の学生時代は、高度経済成長の歪みが出てきた頃で、安保闘争の余韻が残っていたこともあり、学生が社会問題を自分のこととして捉えて自主的に勉強しようという空気がありましたね。奈良女の中だけにとどまらず、他大学のイベントに参加したり、共に何かを作り上げていくことが楽しかったです。

と、そこで働く人の多くが大学院卒。このような仕事に就くには、もっと知識や研究方法を身につける必要があると気づいて、大学院に進学しました。修士が終わるころに研究室の教務補佐の方が異動されることになり、ここで仕事をしないかとお話をいただいたんです。本当に、タイミングですね。

教員として奈良女生を見守る

——教員となられた今、後輩でもある奈良女生をどうご覧になりますか

永廣 今も昔も、フットワークが軽い人が多いという印象です。研究会などでは、準備や後片付けも手早くやってくれて、よく動きますね。先輩を「さん付け」ではなく、「○○先輩」という呼び方をするのも変わらないうえ、体育会系のようなガチガチの上下関係ではないですが、周りに目を配って、やるべきことをしっかりと

女子大のイメージが覆った学生生活

——女子大という環境はいかがでしたか、入学する前後で印象は変わったでしょうか

西村 入学する前は、女子ばかりの環境に違和感を抱くかもしれないと心配でしたが、入ってみると意外にすんなり馴染めましたね。女子ばかりだと、友達同士で常に一緒に行動しなくてはいけないという雰囲気があるかと思っていたのですが、そんなことはなかったです。1人で行動することもあれば、お互いに自分の意見をはっきり言い合える。その環境がとてもありがたかったです。
瀨渡 私も、女子大だからといって何も感じなかったですね。女子ばかりの環境に戸惑うよりも、この大学に入学できた喜びの方が大きかったです。

永廣 実は入学前は女子大というものをちよつと怖く感じていました。でも、いざ入ってみるととても面白かったです。物理を学ぶ女子というのは、数がとても少ないんです。私の高校では学年に1人いるかないかというくらい。それが奈良女に入学してみると、当然クラス全員が物理好き。「こんなにたくさん女子同士で物理の話ができるんだ！」と嬉しくなりました。なかなか他ではできない体験だと思います。

瀨渡 たしかに、高校では理系のクラスは女子がすくなく少ないことが多いですよ。とても納得できます。
——女子大でよかったと思うことはありますか

永廣 オープンキャンパスでも「女子大ってどうですか」とはよく聞かれますね。本来、女子であることと物理を学ぶことの間には

りわかつていると思います。

西村 最近は先輩後輩という関係が少なくなつたと感じていましたが、大学院ではたしかに「○○先輩」と呼んでいますね。奈良女生の変わらない点は、真面目で自分の意見をしっかりと持っているけど、最初から強く出すことはしないところでしょうか。
瀨渡 たしかに、おとなしいと思える時もありますね。私より上の世代は先生との議論がヒートアップして圧倒されることもありましたが、今はなかなか見られない光景です。今の学生はもう少し無茶をしてもいいのではと感じることもあります。潜在的にすばらしい力を持っていることに変わりはないと思います。

——昔も今も変わらないと思える奈良女のいい点はどこなところでしょうか

永廣 先ほど、西村先生が「小規模で丁寧に教えられる環境」と仰いましたが、まさにそこが奈良女のいいところだと思います。1学科の人数が少ない分、学生一人一人の顔が見えやすいです。他大学の先生からもよく驚かれるのですが、先生が学生にすく親しく語りかけますよね。
西村 当たり前のように思っていました。たしかにそうですね！

瀨渡 私の学科は1学年が35人、編入で増えたとしても40人ほど。少数で丁寧に育てられ、しっかりと将来を見据えて就職していく学生が多いです。そして、人生のライフイベントを迎えても、仕事を続け、仕事と育児を両立させて、社会で活躍している方がたくさんおられます。

永廣 大学院では特に、おとなしくてなかなか自分から言葉を出せないような学生に

何の関係もありません。ですが、物理を学ぶ女子にとって、同じ興味を持った女子がたくさんいるという環境はとても貴重です。共学の場合、重いものを持つたりリーダーシップをとったりするのは男性であることが多いですね。女子大では、当然それらもすべて女子同士で行うことになります。とても鍛えられますね。

瀨渡 異性に頼れない環境の中で自主性が育まれるという面はあると思います。さらに奈良女のような小規模な大学ですと、大学内で完結するのではなく、他大学の人と交流しなくては、もつと学外の人からも学ばなくてはという危機意識も芽生えやすい。自分の置かれた環境を自覚し、いろんなことを吸収しようという意識を持つことで学生が鍛えられていくように思います。

西村 女子大だからというわけではないかもしれませんが、奈良女は卒論のテーマが他大学とは異なる傾向がある気がします。学会で問題になっていることという基準ではなく、自分の日頃からの素朴な興味や問題意識を軸に組み立てていくことが多いですね。小規模で、教員が一人一人を丁寧に育てられる環境だからかもしれません。

興味のある分野への理解を深め 研究者の道へ

——研究者の道を志すきっかけはどんなものだったのでしょうか

永廣 幼い頃から研究者になりたいと言っていたのですが、明確に自分の道を決めてそれに向かっていたというよりは、その都度行きたい方向へと進路を選択しているうちにたどり着いたように思います。研

も目が届くんです。最初から厳しすぎる環境に身を置くのではなく、しっかりと成長できるまでケアをするからこそ、社会へ出て自分分の道を歩けるのだと思います。

教育者としての役割を伝えていきたい

——読者の皆さんにメッセージをお願いします

永廣 物理を学びたいと思う方にとって、女子大という環境はとても面白いと感じてもらえるでしょう。理系の女性は社会に出ても男性が多数派の環境に身を置くことが多いです。同じ分野への興味を持つ女子が集う、この貴重な場所にぜひ飛び込んできてほしいですね。

西村 偏差値や受験情報にとらわれず、自分がどんなことを学びたいかを考えてみてほしいと思います。日本史も、高校での学びのイメージが強いかもしれませんが、大学で学ぶことは高校までとは違っています。また、歴史を考える時、それが育まれた場に立つてみるのとても大切なことです。奈良女子大学に進学される皆さんには、かつて都がおかれた奈良という地を肌で感じてほしいですね。

瀨渡 間もなく百十周年を迎える奈良女子大ですが、閉じられた環境だけで優秀な人材が育ってきたわけはありません。歴史が深く、静かな環境で学ぶことを柱にしなが、他大学との交流や外部での活動を通じて得ることも多いです。自分の学びたい環境を、自分の意思で選択して作り上げていく土台があります。どんな刺激を求め、なにを学ぶのか、選択は自由です。ぜひ、奈良女子大でやりたいことを実現させてください。

新たな歴史を描く
資料から紐解く日本の歩み

文学部 人文社会学科
歴史学コース
准教授

西村 さとみ

にしむら さとみ

【研究テーマ】
国風文化論の再検討、平安時代における言語観・
歴史観の変容など
【担当授業科目】
日本史特殊研究、日本史演習、日本文化史演習、
歴史学実習など

先生の研究内容について教えてください
私の研究分野を一言で言い表すと、日本文化史になります。具体的には、9世紀から11世紀にかけて仮名文字で文学作品が書かれ始める時期に、言葉について人はどのように考えていたのか、また平安京に住む人にとって、昔の都に当たる奈良がどのように捉えられていたのかという問題を通して、平安時代の人たちの言語や歴史についての意識を明らかにしていきたいと考えています。その他に、日本日本人といったまとまりにも注目しています。そのようなまとまりが以前から変わらず存在していた訳ではないとすれば、それがどこからどのようにして生まれて来たのか、そしてどう変わっていったのかということについても研究しています。日本的な文化だと言われている国風文化の時



歴史学実習のひとコマ—熊野速玉大社にて

歴史を通して考えたいテーマは何ですか？
改めて考えてみると、「人と人はどうしたらより良い形で繋がるかができるのか」がテーマになっているような気がします。私は何者なのかと問いかけてみると、何が私であるという判断基準になるのかという疑問が生じませんか。他の人々を思い浮かべ、その中で自分について考えようと思いませんか。人間が集団を作る際の基準は何であり、それは変えられるのかどうか、先ほど述べた日本や日本人といった集団は何をもって成り立つのかを意識しながら研究していきたいと考えています。
——— 一番印象に残っている研究についてお聞かせください
それぞれ思い入れはありますが、一つの区切りになったと思えるものは国風文化についての論文です。そもそも「国風」は、平安時代の人達が使っていた言葉であるため、どのような思いを込めてその言葉を使ったのか、そこに込められた意味は何だったのかを考えると、当時の文化の性格が分かるのではないかと考えました。「国風」は中国から伝わった言葉で、本来は地域、今でいう国よりも小規模な地域ごとの歌謡を意味していました。平安時代初期には、日本でもそのような意味合いで使われていたのですが、平安時代中期から日本の風習といった意味でも使われるようになります。そのような意味の

代には、仮名文字で書かれた文学作品がたくさん誕生しました。そのような作品を手掛かりに、その時代の人々の日本に対する意識について知りたいということですね。私達が当たり前だと思っていることも、歴史の中で変化しているのかもしれない、そして変化していることにはきつと意味があるに違いないと考えながら研究しています。

歴史研究の魅力は何ですか？

歴史の研究は、資料を読むことが基本になります。文字資料以外にも土の中から発掘された物、絵画や彫刻、お寺や神社のような建築物も研究資料として挙げられます。自然が創り出している景観も、歴史に影響を与えたという意味では重要な資料の一つです。私の場合は平安時代を中心に研究しているのですが、主に国家が編纂した歴史書、法令や行政関係の文書を読みますが、それに加えて貴族が書いた日記や文学作品も読んでいます。時代が新しくなるにつれて知られていかなかった資料が発見されることもあり、私が対象としている時代では新しい資料が見つかることはほとんどありません。つまり、その時代を研究している人は皆、同じ資料を読むことになり、そうすると、資料に書いてあることをまとめるだけでは研究になりません。資料を使うどのような歴史を描くのかということが鍵になってきます。限られた資料の中から当時の人の思いなど様々なものを汲み取って、どれだけ豊かな歴史像を描けるかが問われるため、その時代の人の考えが理解できたと思える時や、全く関係なさそうなできごとの結びついた時がとて楽しいです。そのような瞬間は多くはありませんが、そこに歴史学の面白さがあるように思います。

授業を通して学生に伝えたいことは何ですか？

実際に歴史の舞台に立つてみるのが重要だと考え、歴史学コースでは歴史学実習という授業で毎年必ずどこかに出掛けています。しかし、その場所を見るだけでは完結せず、そこで感じたことを資料を読む時にどう活かすのかが大切になってきます。そこに立った時に感じる何かを千年前の人も感じていたのかもしれないと思っ、その体験は、歴史の研究において決して無駄ではないと思います。また、研究することは面白いと思ってもらえるような機会を提供できたらと考えています。歴史を研究している人はとても楽しそうなので、きつとどこに何か大事なものがあるとは思えない、だからそれを自分も考えたい、理解したいと思ってもらえるような授業をすることを日々目指しています。

最後に高校生の方へメッセージをお願いします

歴史は高校の授業科目になつていて、大学での歴史研究もその延長線上に思い描かれているのではないのでしょうか。社会学や心理学など大学で新しく出会う学問に対しては、どのような学問だろうと関心を持たれ



歴史研究についてどのようにお考えですか？

過去を見る人間が変わればそこから汲み取るものも変わってきます。歴史を通して考えたいことが各々にあるからこそ、違うものが見えてくるのだらうと思います。あらゆる研究の根底には、人間や人間がつくりだす社会をもっと深く知りたいという思いがあるのだらう。それはつまり、自分自身について知りたいということでもあるような気がします。その手段として自分自身の体験や経験にとことんこだわっていく方法や、今の社会を詳しく分析するといった方法など、様々ありますが、私は今だけではなくもつと違った時代の人たちのことも知りたいのです。歴史の研究を通して、今と昔で変化していることと、変化していないことの両方を知ることによって、人間について深く理解できるのではないかと考えています。

でしよう。しかし、これまでに学んだことのあるものについては、たとえば歴史が好きだったから大学でも歴史の勉強をする、嫌いだつたら別のことをするといったように、あらかじめ判断してしまいがちです。学問の可能性を狭めずに、先入観を捨てて、大学にはどのような学問があるのだらう、学問するとはどういうことなののだらうかということを感じ取ってもらい、その中から自分の問いを探して、それについて考え続けていただきたいと思います。

声

学生記者の



「歴史研究は限られた資料の中からどれだけ豊かな歴史像を描けるかが鍵を握る」という言葉が印象的でした。また、同じ資料を読んだとしてもそこから汲み取るものは人それぞれ違うということに気付かされました。皆さんが知らないような歴史研究の一面について伝えることができているのは幸いです。

山本 萌(やまもと めぐみ)
文学部人間科学科2回生
出身校:聖心学園中等教育学校(奈良県)

教養広場

ハドロン物理学の魅力 「theory of everything」

想い焦がれて〜

理学部 数物科学科
物理学コース
准教授

永廣 秀子

ながひろ ひでこ

【研究テーマ】
ハドロン物理学理論、中間子原子核
【担当授業科目】
力学1、計算機処理、原子核物理学特論など



——先生の研究について教えてください

専門は理論物理学で分野は原子核ハドロン分野です。ハドロンという言葉は聞き慣れないとは思いますがその性質や構造について実験と理論の両側面から説明しています。研究者はどちらか一方を中心に研究するのが一般的で私は主に理論を研究しています。

——ハドロンというものについて高校生をはじめ、専門としていない方にもわかりやすく説明していただけますか？

物体がそれ以上分けられない基本構成となる粒子を素粒子といいますが、現在、素粒子は17種類あると信じられており、私たちの体などの「物質」を構成している粒子はクォークという素粒子から出来ていて、クォークは6種類あり、クォークでできている粒子を総じてハドロンと呼びます。

私たちの体はいわゆる原子というもので構成されていて原子は原子核からできています。さらに原子核は陽子と中性子からできており、陽子中性子はクォーク3つからできています。このようにクォーク3つから出来ているハドロンをバリオン(baryon)と呼びます。もう1種類クォークと反粒子の反クォークからできている粒子を中間子、メソン(meson)と呼びます。即ち私たちの体の中にあるものの大部分がハドロンであると言えます。

——先生の研究内容にハドロン共鳴という言葉があったのですがそれについて具体的に教えてくださいませんか？

ギターを演奏して弦が振動して大きく響く箇所がある現象やオペラ歌手がガラスの前で歌うとガラスが揺れたりする現象を共鳴、共振と呼びます。プランクを例にあげてみましょう。この人の横にいて背中を押してプランクを揺らしてちょうど良いタイミングを見極めて押してあげると振幅はどんどん大きくなり、最大まで振れるようになります。その様子を表にするとして縦軸にプランクの振幅、横軸に振動数(リズム)をとると、ある点のところまで高くなり、ちょうど山のようなグラフになります。このような現象を一般に共鳴と呼びます。同じように、他の現象でも、何かを観測して、山が出来るような結果が出た場合、これも共鳴と呼びます。

ハドロンですがハドロンというものは半減期が非常に短く、作ってもすぐに他の物質に崩壊してしまふため、自然界に存在するハドロンは、ほんの数種類です。そのため人工的に高エネルギーの粒子をぶつけるなどして実験室で作りますが、すぐに別の粒子に崩壊してなくなってしまうんです。従って、ハドロン性質を理解する為には、ハドロン自身を観測するのではなく、ときには崩壊していく粒子の痕跡をたどっていかなくてはなりません。具体的には、例えば、安定している粒子(標的)に別の粒子をぶつけます。このエネルギーを横軸にとり、衝突が起こった後崩壊してくる粒子の数を縦軸にとった図を見ると先ほどのプランクの例に挙げられたように山ができることがあります。その山には必ず何かあるはずなので、それをハドロンができた痕跡であると考えます。これをハドロン共鳴と呼びます。実際には、そこからさらに実験を繰り返して、その原因が非常に短寿命の物体いわゆるハドロンが存在するからであるか、何か外部からの作用によるものであるか、それともただの物体の相互作用による偶然起こった現象なのかということ突き止めていきます。このような現象は非常に多数の異なる種類の素粒子で確認されていますが、すべての現象が完全に理解されているわけではなく、この山はどのようにして理解していくことがハドロン物理学の目標の一つです。

——先生の日々の研究の流れについて教えてくださいませんか？

私は、ハドロン物理学について研究しています。例えば、今までに立てられている仮説が正しいか否かの検証をするために、原子核の中にハドロンを入れたらどうなるかを予想して計算します。実験がなされれば、その結果を受けてそこから考えられる性質や事象なども調べます。

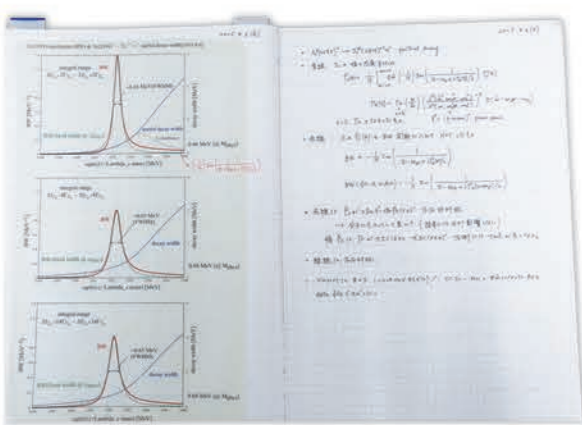
ハドロン物理学を見る方法として私は、以下の三つについて研究しています。二つ目は生成実験といって、安定した粒子に別の粒子をぶつけて、目当てのハドロンが生成される過程を研究するというもの。二つ目の方法は、崩壊実験といって、不安定なハドロンがどのような粒子に崩壊していくかを研究するもの。三つ目は、異なる環境を与えて、どのような応答

——最後に高校生や大学生にむけてメッセージをお願いします。

何でもいので何かに興味を持ち、ワクワクする気持ちを持つことが大切です。他の人の目を気にせずに自分の好きなことを突き詰めていくのが「学問」になると思います。大学の勉強というものは教えられているものをなんとなく理解するというよりは何か「これは面白い」というようなものを見つけてそれに邁進していくことで楽しくなっていくのではないかと思います。

があるかを研究する方法。

私の研究は、ある仮説に対してどのような実験でそれを確認することができるかを考えることが一連の流れです。また、そのような実験は、非常に大きな加速器を用いるので、他大学や他の研究機関と共同研究という形で研究をしています。通常、実験研究者と理論研究者は、互いに独立して研究し、結果を持ち寄って(研究会や学会などで発表し)議論を行っていきます。一方、我々の研究グループは、研究や実験の準備段階から実験研究者と理論研究者が密に議論を行って研究していきます。これは非常に恵まれた環境下にあると思っております。それにより、実験結果もたらす物理現象の意味を深く理解することが可能になります。



永廣先生の研究用ノート

——今までの研究で印象に残ったこと、大変だったことを教えてください。

奈良女子大学大学院を卒業後、大学の非常勤講師をしていました。その後、大阪大学核物理研究センターに研究員として採用され、またその翌年日本学術振興会の特別研究員に採用されました。その時に交付された自分の研究費でスペインのバレンシア大学に渡って研究する機会を得ました。それまでは大学の先生の指導下で行う共同研究をしていましたが、スペインの大学では同じ年くらいのスペイン人ポストドクと二人で研究を行い、指導教員のいない研究を2ヶ月間行いました。言われるがまま計算するのではなく、自分たちで議論を行い、そして、新たに得られた知見について結論をだし、論文を書き、専門雑誌に投稿して、2ヶ月という短い期間で二つの研究に仕上げるといった経験がありました。またこれは逆に、別の研究者同士で非常に議論が盛り上がりたけれど、研究発表するのに非常に時間を要した経験もあります。そのとき、研究者同士で議論しあうのは非常に楽しいことだけれど、「論文を書き(世界に)発表するところまでやり遂げる」ことの重要さに気づきました。

研究を論文として世に出し、公的な機関に審査され、学術誌や論文雑誌に記載されるように情報発信し、研究をアウトプットする作業をしなければ、研究していることにならないと改めて認識しました。

——先生が研究してみようと思われたきっかけを教えてください。

もともと理科が好きで小、中学生の頃にNHKスペシャルで地球大紀行の番組をよく視聴していました。その番組内でビックバン、素粒子、宇宙などのテーマに魅力を感じ、「theory of everything」とも言いますが、何もかも説明できてしまふという理論に非常に興味を湧いたのが物理の道に進んだきっかけです。素粒子、クォークなどの単語を聞くだけで楽しい時間を過ごすことができました。

——高校と大学の物理学を学ぶ上でどういうところに気をつけて学ばよいか、教えてください。

物理と数学は現在、別々に分類されていますが物理と数学はもともと同じ分野です。数学と物理は共に発展していきました。少し、抽象的になってしましますが数学から離れると物理は単なる物語(SF)になってしまいます。背景に数学がないと成り立ちません。美しい物理理論というのは美しい数学理論でないと成立しないと言えます。例えば、数学を知らないまま物理をやるとすぐく覚えることが多すぎて、時間がかかってしまいます。実験すると3個の独立した関係式が出てくることがありますが、数学を習得していると覚える必要のある式は1個で済み、あとはその1個から導き出すことが出来るようになります。高校の物理で覚えることが多く大変だと感じている人が多い理由は、先に数学を習得するということをせずに、平行して数学、物理は物理として学ぶからです。これはカリキュラム上そうならざるを得ないからですが、高校を卒業すると、数学もひと通り学んでいると思えます。その知識を持って、もう一度物理を見ると、これまで独立だと思っていた式もいずれ一つの美しい式にまとまることわがわがわかるようになります。

声

学生記者の



今回の取材の中で、「いずれ一つの美しい式にまとまる」という言葉にロマンを感じました。先生の研究に対する熱い想いを近くで感じる事ができ、私もワクワクする気持ちをいつまでも忘れずに学んでいきたいと思いました。また、記事を読んで「楽しさ」が伝わるようなものになっていれば大変嬉しく思います。

中根 明日香(なかね あすか)
理学部数物科学科数物連携コース3回生
出身校:四天王寺高等学校(大阪府)

生活の器を豊かにする
学問

～居住者のリアルな声を手がかりに～

生活環境学部
住環境学科
教授

瀬渡 章子

せと あきこ

【研究テーマ】
防犯からみた住環境の安全安心に関する研究 他
【担当授業科目】
建築計画学、住環境計画学、設計演習Ⅲ、CAD
演習、デジタルデザイン演習



先生の研究内容を教えてください

私の研究分野は、住居学あるいは住環境学と呼ばれる、その中の住環境計画学が中心です。これまで、「防犯」「集合住宅」「子ども」の3つを主なキーワードとして研究を続けてきました。さらに、住宅は単体ではなく、地域の中に存在していることから、生活エリアの中でどのように住むかという「まちづくり」という観点も含め、これら4つの領域が重なる部分に発生する問題を解決・改善する方法を研究しています。

まず学生時代に研究を始めたのが、高層住宅の防犯問題でした。当時の多くの高層住宅は開放されていて、エレベーターや避難階段、屋上といった死角が数多くあったことから、犯罪が多く発生していたのです。特にアメリカでこの傾向は顕著に見られ、この危険性について論じられた本も出版されま

した。その本を翻訳して日本で出版したのが当時の私の研究室の教授だったこともあり、では日本の高層住宅は安全なのかということも研究が始まりました。その結果、アメリカほどではないものの日本の高層住宅でも様々な犯罪が発生していることを明らかにすることができました。その後はエレベーターの防犯小窓や防犯カメラ、入り口のオートロック設置などの対策が施されて、犯罪は次第に減少してきました。

日本の犯罪は2002年にピークを迎えますが、2000年代に入ってから学校の防犯について研究するようになりました。当時は「開かれた学校」が目標とされていたのですが、2001年に大阪教育大附属池田小学校で不審者侵入事件が発生しました。これをきっかけに、子どもも親も安心できる場にするために、各教室に拡声器やホイッスルを置く、不審者侵入時の校内放送の暗号を決める、見守りボランティアを配置するなど、低予算でできる対策をはじめ、不審者の侵入阻止、早期発見・通報につながる建築計画上の対策も講じられるようになりました。

奈良女子大学出身とのことですが、学生時代についてお聞かせください

私は出身も奈良で、実家から通える奈良女子大学を選びました。入学したばかりの頃は、自宅生で情報も乏しく、大学生生活の送り方も、勉強の仕方もよくわからなかったのですが、学生寮にいる同じクラスの友達のところへよく遊びに行き、上級生の人からもいろいろ教えてもらいました。授業は、板書をひたすら写すようなものもあり、わからない内容は図書館や書店で本を探して理解しようと努めていました。また、当時は上回生になるまで専門科目があまり勉強できず教養科目ばかりだったのですが、そんなときに、学

に行く、実務として設計をする、など様々な方法がありますが、私は、住人の方への聞き取りによつて実態を調査し、その地域にある問題をj知るといふ形を取ることが多いです。住宅や住環境はいわば生活の器であつて生活に合わせて形を変えていくのが自然ですから、現在の生活そのものを調査する必要があるのです。住人の方へのアンケートの他、現場で一緒に活動しながら観察を行うという参与観察の手段をとることもあります。

近年の住環境に関する課題点はなんですか？

一般論として近年の問題は、人口減少や高齢化に伴う施設などへの移動の影響による空き家の増加です。空き家は犯罪者の基地に利用されたり、火災が発生したときに燃え広がりがやすかつたりと、防犯上も防災上もよくありません。空き家の原因は複雑で問題の解決は一筋縄ではいきませんが、地域では福祉活動に利用するなど空家の活用が模索されています。

もうひとつの課題は、現在のライフスタイルに合わせた住環境づくりです。3世代家族から、核家族へと社会が変わり、さらに現在では夫婦のみ、単身、片親家庭、共働き家庭など、家族の形は多様化してきています。それぞれの生活に合わせて住まいづくりがこれからはますます重要になります。

また住まひの防犯対策についていえば、最近の防犯強化は一定の効果がみられる一方で、過度な閉鎖的j社会、監視カメラj社会になる傾向があります。もう少し見通しをよくして犯罪が起きにくい環境づくりができたらいいのですがなかなか難しく、どのようにバランスをとっていくかが課題です。

住環境を研究対象に決めた理由やきっかけは何だったのでしょうか？

大学の学科を選んだのは受験の少し前です。当時は大学側からの情報発信も少ない時代だったので、正直どんな学科なのかはあまりわかつていませんでした。ただ、衣食住に興味があり、その中で住分野は高校までの授業でもあまり教つてこなかつたから、わからないなりに面白そうだと思ひ、選びました。実際に入学し基礎的な知識を身につけていくにつれ、当時の急速な社会発展や近代の産物である高層住宅が孕む問題に目を向けるようになり、時代や社会のひずみが住

読者の高校生に向けて一言お願いします

住環境学は、生活の器である住まひをどれだけ豊かなものにするか、という重要な学問で、楽しいだけでなくやりがいがあります。また、問口が広い学問で、室内の環境から都市の環境まで研究対象も多岐にわたります。さらに、それぞれの対象に多様な課題があるので、やり始めると奥行きも広いのが魅力です。学んでいくうちに、訪れた先々で建築や都市の様子を見て、何故こんな風になつてゐるんだろう、と考えるのが面白くなりますよ。



コーポラティブ住宅のゼミ合同見学会の様子

先生が現在お住まいのコーポラティブ住宅について特徴や企画時の話を教えてください

私は現在コーポラティブ住宅に住んでいるのですが、これは入居を希望する人たちの話し合いによるオーダーメイドのマンションです。手間暇がかかりますが、よい点も多くあります。第に自由設計であることで、個々人の生活に合わせた間取りにすることが出来ます。第二に納得のいく価格にできること。使う素

材を自分で選べるため、自分の理想や経済事情に合わせて安くも高くも出来ます。また、土地代、設計料、建設費がどれだけかかるのか参加者に公開されることも特徴です。第二に、暮らし始める前に何回も会合を開いて住宅への思いを住人と共有し、時には議論をするということもあるため、その中で互いを知つて良好なコミュニティを築けることです。第四に、部屋の間取りだけではなく、屋外環境や集会所などの共同部分についても話し合つて決め、豊かな環境づくりができることです。

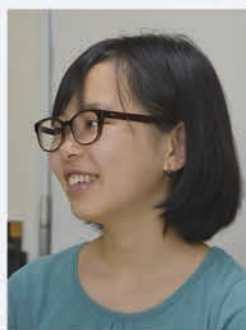
私が現在住んでいるコーポラティブ住宅は土地探しも住人募集も自分たちで行つたので、計画を開始してから完成まで4年くらいかかりましたね。今でも2ヶ月に1回は集会を開いているのですが、自分の意見をはつきり言う方が多いので、ひとつ話題が出ると熱い議論になります。関係が悪化したらどうするんだ、といった意見も聞きますが、きちんと話し合つてを基本に今のところは穏やかに住んでいて、年末に餅つきをしたり春に中庭で桜の花見をしたり皆さんと楽しく過ごしています。最近、ひとり暮らしが難しくなつた高齢の方が退去されて空き部屋ができることもあるので、次に若い方が入つてくれるといいな、と考えています。

住環境分野の研究はどのように行われるのでしょうか？

実験的手法をとる、集落調査のよつに現場

声

学生記者の



松原 結花(まつばら ゆか)
文学部言語文化学科2回生
出身校:東京都立町田高等学校

自分と違う学部の先生への取材をすることになり、初めは少し不安でしたが、瀬渡先生の研究のお話は想像していた以上に身近な話題で興味深く、取材の時間もあつという間に過ぎてしまいました。学部の枠にとらわれずに広く知識を得る楽しさを学ぶことができました。

教養広場登場教員にゆかりのある

● 卒業生、在学生のみなさんより ●



長田 明日華(おさだ あすか)
大学院人間文化研究科博士後期課程
比較文化学専攻
出身校:駿台甲府高等学校(山梨県)
西村先生との研究生活

私は西村先生のゼミで、平安時代の文化史について研究しています。平安時代の中頃は「国風文化」の時期といわれているように、仮名文字を用いて書かれた古典といわれる文学作品が次々に誕生しました。このような、それまでになかった仮名文字を用いた作品が新たに誕生するこの時代は、一体どのような社会であったのかということに強い関心があり、大学院で研究を続けることを選びました。大学入学以前、文化史は日本史の教科書の中で政治史や経済史とは別個の項目が立てられ、社会の主要な出来事とは直接の関係がないものとして扱われているように思われました。私が関心を抱いていた平安時代の文化も、なぜこの時代に「国風文化」と呼ばれるような文化が興隆し、その中で仮名文字を用いた文学作品が誕生することとなったのかという問題に対する明確な答えがないように思われ、漠然とした疑問を抱いていました。しかし、なぜ特定の時期に特定の文化が興隆するのか、人はなぜ文化を必要とするのかという問題は、過去を通して人間社会を捉える歴史学という学問の中で重要であるということ、西村先生のゼミを通して実感するようになりました。文化史は、過

去の人々がどのような文化を創り上げたのかという出来事を知識として得るだけでなく、それが人間社会を捉える上でどのような意味のある出来事であるのかを考えることによって、現代に生きる私たちと切り離すことのできない問題だと考えるようになったのです。

西村先生のゼミでは、さまざまな視点から歴史を捉えようとする院生たちが参加しており、毎回活発な議論が繰り広げられています。西村先生の和やかなお人柄が、自由な議論を呼び起こしているように思われます。西村先生は、史料を読み込み自らの視点で歴史を捉えるという各自の視点を大事にしてください。ゼミの皆さんは主体的にもの考えていくことを意識しつつ、日々議論しているのだと思います。自分の考えを人に伝えることは難しいのですが、ただ黙々と研究するだけではなく他者にわかりやすくかつ論理的に伝えていくことの重要さも、西村先生のゼミで学んでいます。

もちろん、ストレートに答えが出るものではないため、どのように研究を進めていくべきかという方法論も含めて手探りの状態です。そのため、日々悩み、迷いつつ研究しています。そうであっても、史料を通して人びとの営みの意味が少しでも見えてくると、言い表せない感動があります。迷っている時も何かが見えてきた時も、常に西村先生はあたたかく見守ってくださり、時には鋭いご指摘をいただきつつ、自分の研究を続けています。

西村先生の厳しくもあたたかなご指導をいただき、ゼミの皆さんとともに研究を進めている「今」が、のちにかけていえない思い出となることと予感しています。これからも先生のもとで学びつつ、研究を発展させたいと思います。



山本 美和(やまもと みわ)
理学部物理科学科卒業
現:三菱日立パワーシステムズ株式会社(品質保証部)
出身校:滋賀県立膳所高等学校
永廣研究室での学びを世界へ

「最後の1年なら、したい研究を思いっきりしましょう!」
経済的な理由で大学院への進学を諦め、研究室配属先を迷っていたときに、永廣先生からかけて頂いた言葉です。そして、「1年だけだから卒業できるよう当たり障りなく研究すればいいや…」と後ろ向きであった気持ちが、「1年しかないからこそ、やれるだけのことをやってみよう!」と180度変わって前向きになるきっかけとなった言葉でもありました。卒業論文では、研究室配属前から興味があった「宇宙線を使った火山内部探索のシミュレーション」に取組みました。研究室配属前は、答えのある課題に取組むことが多かったため、答えのない課題に対して、自分で打ち手を考えて、失敗しながらも進めていくという初めての経験の連続でした。先生は、私が読みたい論文を見つけてくるとその論文をご入手くださったり、うまく計算が出来ず悩んでいると一緒に計算式をご確認ください。と必要な時にいつも適切なアドバイス・手助けをくださいました(そして、実は論文にする研究結果が当初予定よりも早く出来たのですが、新しい追加の課題も忘れず与えてくださるおまけ付きで。)

今思い返しても、私の成長に寄り添って、適切なアドバイスや課題を与えてくださる先生の下で、言葉通り、したい研究に思いっきり明け暮れ、大学生活4年間の中で最も充実した1年であったと思います。現在は、世界各地に発電所を作る会社で品質保証エンジニアとして働いています。主な業務は、お客様と検査計画に対して契約前に交渉を行い、契約後にはお客様との契約や法律を満足する機器を納めるために社内外の方々や調整を行っています。私は海外のお客様が担当のため、これまで経験したことのない国である場合は、その国の法律を調査することから始まります。そして、関係者の方々には教育をすることも多く、人に教えることの難しさにもよく直面します。

とてもやりがいを感じる反面、行き詰まって苦勞することも多いですが、そのような中でも諦めずに取り組み続ける姿勢は、卒業研究を通して学んだ「答えがない課題に取組む姿勢」、そして先生とのやり取りの中で実感した「人に教える姿勢」が基になっているのは確かです。

これまで恥ずかしくて先生に伝えておりませんでした。先生の下で学んだ1年間は、社会人になってからも私を支え続けてくださっています。永廣先生、本当にありがとうございました!!

最後になりましたが、永廣先生、そして奈良女の皆さま、充実した大学生活を送ることができ、心から感謝しております。そして、これからも奈良女子大学が、学生の方々がのびのびと自分の可能性を知り、伸ばせる学びの場であり続けまことを心から祈っております。



梶木 典子(かじきのりこ)
大学院人間文化研究科生活環境学専攻修了
現:神戸女子大学家政学部家政学科 教授
出身校:大阪府立大手前高等学校
瀬渡先生の「厳しく、優しく」を見習う

私は瀬渡先生のもとで子どもの遊び環境に関する研究をすすめ、博士学位を取得しました。子育てをしながら大学院生活を送った私にとって、瀬渡先生は多様な役割のロールモデルでした。まず研究者として、その視点から「人のくらし」を大切にすることからぶれないという点です。「人は、子どもから高齢者までのことと広く捉え、特に子どもを一人の意見を持つ人格として尊重して扱うことを大切にされています。これは私の研究の原点となっています。大学院では調査を数多く行いました。瀬渡先生からは、現場に何度も足を運び、人間関係を築くことが重要であると教えていただきました。私は、自分の調査対象である冒険遊び場や児童館など子どもの遊び場に入り込んで、子ども達と遊んだり話を聴いたり、紙面アンケート調査だけでは得ることができないような当事者の生の声を取り上げることができました。そして、自分が主体的に動くことで、情報は思っている以上に得られましたし、人とつながることもできました。この地道な積み重ねこそ、研究者として重要なプロセスであり、大切な視点です。さらには、研究成果は「必ず還元する」という点です。研究成果を学会で発表することや講演会等で話をする以外に、調査に協力して下さった方々や関係諸機関

に報告することにより、成果を還元する姿勢です。当然のこととはいえ今も継続していますが、これを実践する研究者は少なく、高く評価していただいています。

一方、研究者にとって論文執筆は避けて通れませんが、私はこれが苦手で、先生に最も迷惑をかけたと思います。とにかく「書けない」日々が続き、そんな私に根気よく付き合ってくださいました。博士論文執筆時には、最後の最後までなかなか先生のOKがもらえず苦戦しましたが、提出できたときの達成感や言うまでもなく、思い切ったような気分でした。いつも穏やかで優しい瀬渡先生からはなかなか想像できないかもしれませんが、決して妥協しない姿勢や成果を高めるための惜しめぬ努力など、研究に対する厳しさは、そこで学んだ学生にしかわからない側面です。

瀬渡先生には、研究だけではなく、家庭・子育ての悩みなども、人生の先輩として相談に乗っていただきました。先生に悩みを相談すると、聞いてもらえただけで深刻だったはずの自分の悩みなんてちっぽけだなあと、元気が出たことも度々ありました。「人生はなるようになるし、そんなに深刻に考えなくても大丈夫、大丈夫」とポジティブな意見をくださるのです。「こんなにポジティブに考えることができるのは、先生の特技ではないか?」と思ったことすらあります。一方で、ご自身の失敗談についてもよく聞かせてもらい、その行動の大胆さに驚くこともありました。とにかくチャームポイントを尊敬しています。

私の人生を豊かにしてくださった先生に出会えたこと、それは高校生の時に奈良女子大学に一目惚れしたことから始まっていました。運命ですね。私も「優しく、厳しく」を motto とし、奈良女子大学で学んだ多くのことを、今は神戸で学生たちに伝えていきます。

研究の現場から最新情報をお届けします!



文学部 人文社会科学文化メディア学コース教授
武藤 康弘
もとう やすひろ

出演番組 NHK総合テレビ
「土偶ミステリー〜日本最古のフィギュア その謎に迫る〜」
(2018年7月16日放送)
土偶とは何か。土偶は縄文時代に作られた土人形です。私は何を象徴して、どのように使用されたのかの解明を目指したテレビ番組に出演しました。番組のプロデューサーは放送の約2か月前に私の元を訪ねて来られ、私たちは構成について入念に検討しました。私は、縄文時代後晩期における気候の寒冷化と、狩猟の発達について指摘しました。当該時期は、石鏃が増加し、イノシシや犬と

いったそれ以前の時期には存在しない動物土偶が増加することから、人々は堅果類といった植物食だけでなく狩猟に高度に依存した生業だったと考えられ、狩猟の豊穡や安全を祈願するための男性土偶が創出された可能性を指摘しました。種々論争がある部分については、私の恩師である縄文研究の大家である小林達雄氏が登場し、土偶は女性でも男性でもない精霊を表現したものと断言するといった見解が述べられました。番組に登場した縄文土偶の研究者である菅田亜紀子氏は、私が高大学で開講している考古学の授業の元学生です。現在、菅田氏が執筆し、私が監修して出版した図書は5冊を数え、さらに作成中のものもあります。

考古学は、過去のことを解明する学問ですが、現代人が過去をどのように認識するのかがという点で、現代考古学は新たな展開を迎えています。これらの図書も一般読者を対象としたものであり、多くの読者を得ています。縄文土器や土偶は今ブームとなつていますが、縄文時代の新たなイメージを形成する一助となれば監修者として本望です。



武藤康弘教授が監修した書籍(左から)「はじめての土偶」(世界文化社)、「はじめての土偶手帖」(同)、「土偶のリアル」(山川出版社)、「知られざる縄文ライフ」(誠文堂新光社)、「おもしろ謎解き「縄文」のヒミツ」(小学館)

が執筆し、私が監修して出版した図書は5冊を数え、さらに作成中のものもあります。考古学は、過去のことを解明する学問ですが、現代人が過去をどのように認識するのかがという点で、現代考古学は新たな展開を迎えています。これらの図書も一般読者を対象としたものであり、多くの読者を得ています。縄文土器や土偶は今ブームとなつていますが、縄文時代の新たなイメージを形成する一助となれば監修者として本望です。

生活環境学部 食物栄養学専攻 准教授

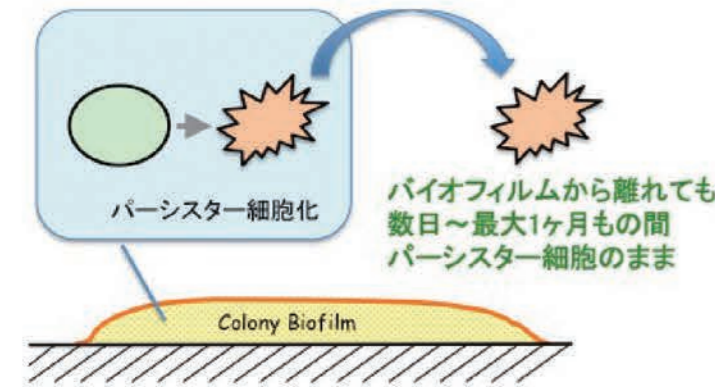
前田 純夫
まえだ すみお

「細菌細胞の抗生物質耐性の記憶現象」の発見

前田純夫准教授の研究グループが、「細菌細胞の抗生物質耐性の記憶現象」について新規発見を行いました。本研究は細菌が、「バイオフィーム」という固体に付着した形態で増殖すると、「パーシスター細胞」という一時的な抗生物質耐性細胞が顕著に増加し、その生み出されたパーシスター細胞は、バイオフィームから離れても、数日から2ヶ月もの長期間、耐性状態を記憶(保持)できる、という新現象を発見したものです。細菌にこのようなパーシスター細胞の記憶現象が存在することは、本研究が初めて明らかにしました。バイオフィームは、人体、食材、生活用具など身近な環境に普通に存在するものであるため、パーシスター細胞への新たな注意と対策が必要ということが示されました。

「パーシスター細胞」というのは、本来は抗生物質感受性の細菌が一時的に耐性化してしまう現象で、それらが人体に侵入する場合は人体内で発生すると、感染症の治療を困難化する要因と

細菌細胞のパーシスター細胞化とその記憶現象



2018年6月26日 国際学術誌Frontiers in Microbiologyオンライン版に掲載(https://doi.org/10.3389/fmicb.2018.01396).
2018年7月16日 日本経済新聞、同8月25日 朝日新聞に記事掲載
2018年9月4日 国際学会FoodMicro2018(ドイツ)で大学院生が発表

奈良女子大学なでしこ基金

「創立百周年記念事業特定基金」へのご協力をお願いします



奈良女子大学は、2019年5月に創立百周年を迎えます。この記念すべき節目にあたり、本学は新たな学生寄宿舎の整備にさらに重点的に取り組むべく、「奈良女子大学なでしこ基金創立百周年記念事業特定基金」を設けました。日本各地ならびに世界から集う学生に対し、安全で安心できる生活拠点を提供することは、本学の大きな使命といえます。

なお、皆様方のご理解のもと、2018年6月から9月までの間に、14,967千円のご寄附をいただきました。心から温かいご支援とご協力に感謝申し上げます。

【募金の期間】 2018年6月-2019年5月
【目標額】 1億円
【ご協力をお願いする金額】 5千円以上(学生は2千円以上)



創立百周年記念事業特定基金
HPIはこちら→



Campus Topics

■ 国立大学法人奈良教育大学と連携協議に関する合意書調印式を実施

2018年7月27日、国立大学法人奈良女子大学と国立大学法人奈良教育大学は、連携協議に関する合意書調印式を本学にて行いました。奈良の国立機関と協力しながら奈良を基盤とした高等教育の機関を総合化し、未来社会を牽引する人材を地域・全国に輩出するために教育研究の学問の府(奈良レτζズ)を創成することを将来の目標とします。教育研究資源を統合的・効率的に活用し、それぞれの強み・特色を活かし、社会の要請に応えるために2022年度を目処に一法人二大学を目指します。

そのための柱として「教養教育の充実・強化」「教員養成の高度化」「奈良の地での工学人材の輩出」の三つの取組を実現するための検討に入ることを合意しました。



記者会見をする今岡春樹学長(奈良女子大学、右)と加藤久雄学長(奈良教育大学、左)



合意書調印式での両大学長と関係理事

■ 夢ナビLIVE2018、国立大学法人奈良女子大学説明会を実施

本学では全国5会場(大阪、東京、名古屋、仙台、福岡)で実施の夢ナビLIVE2018に参加し、数百人規模での本学教員による講義ライブ、個別ブースでの入試相談を行いました。

また、2018年度国立大学法人奈良女子大学説明会を全国4会場で実施し、3学部の教員による本学の概要や大学での学びについての説明、会場地出身学生による個別相談の受付や学生生活の紹介を行っています。10月に既に広島、金沢の2会場で終了し、今年度は残り2会場(11月20日名古屋、11月24日神戸)です。是非ご参加ください。

■ 第4回奈良女子大学ホームカミングデーを開催しました



演奏者の中島千津子さん(左)と林浩子さん(右)

当日は、本学の施設見学をはじめ、昭和63年度卒業30周年記念同窓会企画「同窓生による箏曲コンサート」、コンサート後のティーブレイクという流れで実施されました。

また、演奏会後のティーブレイクでは、卒業生同士が当時を懐かしんだり、近況を報告するなど、久々の同級生との会話に花を咲かせ、大盛況での閉会となりました。

2018年8月18日、第4回奈良女子大学ホームカミングデーを開催しました。

箏曲コンサートでは、本学理学部卒業生で、本学箏曲部飛鳥会OGである中島千津子さん、林浩子さんによる琴や三味線を使った演奏が行われ、245名もの同窓生をはじめとした参加者が素敵な音色に聞き入りました。

最後に、国立大学附属学校には、教育実習を担当するという役割があります。教員養成の高度化が求められるようになり、奈良女子大学でも連合教職大学院を設置し、教員養成のみならず現職教員のリカレントの場としての教員研修学校の機能を附属学校で担えるように取組を進めています。



2010年に創立100周年を記念して撮影した生徒会企画の人文字



ISEF世界大会にて3位入賞

国立大学附属学校の役割として、国の先導的な教育研究を行うことが求められます。附属中等教育学校では、平成17(2005)年から文部科学省よりスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けています。この間、SSH全国生徒研究発表大会で同校の生徒が文部科学大臣奨励賞や科学技術振興機構理事長賞を受賞し、また高校生科学技術チャレンジ(JSEC)でグランドアワード日本代表に選ばれ、世界大会(ISEF)で3位に入るなど、数々の表彰を受けてきました。現在は、奈良女子大学理学系女性教育開発共同機構と附属学校の各教員が協力して、6年一貫の課題研究カリキュラムづくりや理数融合授業の教材開発に取り組んでいます。

また、国際交流事業への取組みも同校の特色の一つです。平成9(1997)年に始まった、グローバルクラスルームは、イギリス、スウェーデン、チエコ、ドイツ、南アフリカ、日本の6か国の高校生が世界的な課題(民主主義、経済格差、環境破壊など)をテーマに会議を開くものです。現在は、ユネスコスクールとしてアジア太平洋地域の学校とパートナーシップを結び、「アジア高校生国際会議(Asian Youth Forum for Sustainable Future)」に引き継がれています。台湾、韓国、インドネシア、マレーシア、日本の5か国の高校生が一堂に会し、今年「The Fourth Industrial Revolution(第4次産業革命)」をテーマに韓国で開催されます。他には、科学技術分野の交流を行う、「さくらサイエンスキャンプ」も実施しています。これは、台湾、韓国、ウズベキスタン、ベトナム、インドネシア、日本の6か国の様々な文化的背景を持つ高校生が奈良女子大学でサイエンスワークショップを受講し、与えられた課題に対して協働して探究表現活動をするものです。

さらに、附属中等教育学校の一番の特色として、生徒が自主的に運営する学校行事「学園祭」があります。毎年9月に2日間一般公開されるべ4000人の来場者があります。5年生(高校2年生)が中心となって運営委員会を立ち上げ年間かけて活動し、予算、決算などもすべて運営委員会が取り扱います。また、5年生で実施する修学旅行も行き先の決定から旅行者の見積もりまですべて生徒主体で行われている自主性を重んじた行事です。

100年を超える歴史を持つ附属幼稚園、附属小学校、附属中等教育学校の3校園は、それぞれの校種において独自の取組を行いながらも、自由で伸び伸びと個性を育むという教育理念を共有しています。奈良女子大学では、3歳から附属学校園を卒業し、さらにその先の大学・大学院までを見通した、「25年間の学び」を体験できます。(附属中等教育学校 副校長 吉田隆)

奈良女子大学附属中等教育学校は、「自由・自主・自立」をモットーとする、生徒が主体的に活動する学校です。明治44(1911)年の奈良女子高等師範学校附属高等女学校創設を始まりとし、戦後男女共学となりました。昭和48(1973)年から中高貫教育に踏み切り、平成12(2000)年から中等教育学校となり、平成元(1989)年に文部省(当時)の研究開発学校の指定を受けて以来、途切れることなく現在まで様々な研究開発に取り組んでいます。

サイエンスハイスクール(SSH)の指定を受けています。この間、SSH全国生徒研究発表大会で同校の生徒が文部科学大臣奨励賞や科学技術振興機構理事長賞を受賞し、また高校生科学技術チャレンジ(JSEC)でグランドアワード日本代表に選ばれ、世界大会(ISEF)で3位に入るなど、数々の表彰を受けてきました。現在は、奈良女子大学理学系女性教育開発共同機構と附属学校の各教員が協力して、6年一貫の課題研究カリキュラムづくりや理数融合授業の教材開発に取り組んでいます。

また、国際交流事業への取組みも同校の特色の一つです。平成9(1997)年に始まった、グローバルクラスルームは、イギリス、スウェーデン、チエコ、ドイツ、南アフリカ、日本の6か国の高校生が世界的な課題(民主主義、経済格差、環境破壊など)をテーマに会議を開くものです。現在は、ユネスコスクールとしてアジア太平洋地域の学校とパートナーシップを結び、「アジア高校生国際会議(Asian Youth Forum for Sustainable Future)」に引き継がれています。台湾、韓国、インドネシア、マレーシア、日本の5か国の高校生が一堂に会し、今年「The Fourth Industrial Revolution(第4次産業革命)」をテーマに韓国で開催されます。他には、科学技術分野の交流を行う、「さくらサイエンスキャンプ」も実施しています。これは、台湾、韓国、ウズベキスタン、ベトナム、インドネシア、日本の6か国の様々な文化的背景を持つ高校生が奈良女子大学でサイエンスワークショップを受講し、与えられた課題に対して協働して探究表現活動をするものです。

このような活動を通して、「世界的・人類的な課題に対して基本的な知識と技能を持ち、自己の価値観に基づいて判断・主張行動ができる、21世紀に必要とされる教養を備えた市民リーダーを育成する」という教育目標を達成しようとしています。

最後に、国立大学附属学校には、教育実習を担当するという役割があります。教員養成の高度化が求められるようになり、奈良女子大学でも連合教職大学院を設置し、教員養成のみならず現職教員のリカレントの場としての教員研修学校の機能を附属学校で担えるように取組を進めています。



学園祭の中庭大パネル

「21世紀に必要とされる教養」を育む学校です 附属中等教育学校編

あの頃の奈良女へタイムスリップ!!

=本学自慢の名物教授 第2回 水木要太郎編=



プロフィール

1865年	伊予国伊予郡南伊予村（現・伊予市）に生まれる
1883年	松山中学校（現・松山東高校）を卒業
1887年	東京高等師範学校（現・筑波大学）を卒業
1888年	三重県一志郡野本村高等小学校教員となる
1890年	奈良県尋常師範学校（現・奈良教育大学）教員心得となる
1895年	奈良県尋常中学校（現・奈良県立郡山高校）教諭となる
1909年	奈良女子高等師範学校（現・奈良女子大学）教授となる
1913年	奈良県史蹟勝地調査会委員
1915年	奈良帝室博物館（現・奈良国立博物館）学芸委員
1919年	史蹟名勝天然記念物調査会査査員
1923年	勅任官待遇となる
1924年	勲四等瑞宝章を授与される
1927年	奈良女子高等師範学校教授を退官し、講師となる
1938年	逝去（享年74歳）

※奈良女子高等師範学校時代の写真：個人蔵 写真提供 国立歴史民俗博物館

著作・交友歴

1895年	「大和名処ならのしるべ」 「奈良の名所」
1903年	「やまとめぐり」
1906年	大福帳を書き始める
1908年	岡倉天心、黒板勝美、關野貞らと美術院第1回講習会を開く
1914年	「吉野精華」
1919年	喜田貞吉・黒板勝美、高橋健自と史蹟名勝天然記念物の講演会を開く
1920年	三浦周行らと史蹟名勝天然記念物の講演会を開く
1921年	「世界の宝 法隆寺」
1923年	大和史学会の設立に関わる（協賛人となる）
1927年	「大和の栞」
1931年	大和国史会の設立に関わる

*内藤湖南、梅原末治、濱田耕作、ウオーナー、小林秀雄、若山牧水、柳田國男ら著名文化人との交友も知られている。

◆ 水木十五堂と大福帳

十五堂とは、水木が晩年、もっとも好んで使った雅号、尊敬する古今の15人の肖像画を集めることを祈願した雅号といわれています。奈良で当時もっとも有名な郷土史家であり、本学の前身、奈良女子高等師範学校で水木は、博識と独特の話し術で国史国文を教える名物教授として知られました。さて、幕末に四国で生まれた彼は高等師範学校を卒業後、奈良へ教員として赴任し、奈良にこだわる教育者、研究者でした。東京や京都を拠点とする文化人ではなく、「大和の水木が、水木の太和か」と称される当時を代表する奈良文化人でした。奈良の歴史考古、美術、地理に精通し、地元と東京・京都を結ぶ文化サロン、文化人ネットワークを作るのに努めました。水木は教育者、研究者だけでなく、稀代のコレクターとしても知られています。この収集癖の集大成ともいえるものが、水木の大福帳です。一般に大福帳とは商家での帳簿、備忘録ですが、彼の大福帳は、奈良文化人としての水木の交遊録、サイン帳であり、大部の大福帳が300冊以上も残されています。名だたる歴史家、考古学者、美術史家の署名や、水木による彼らの姿のスケッチ、彼らの研究成果メモなどが記されています。また、大福帳には、水木自身が閲覧した古文書、美術品の筆写や、自分自身のコレクションの詳細な情



大福帳：天理大学附属天理図書館蔵
写真提供 国立歴史民俗博物館

報も記され、彼のフィールドノートにもなっています。それだけでなく、新聞の切り抜き、文章の下書き、落書き、買い物メモなど、博覧強記、蒐集魔たる水木の気迫が伝わってきます。いつも、この大福帳を懐に入れて持ち歩き、息子の

水木直箭によれば、「気に入った物、参考になると思うものは片端から写しておく」ノートだったといえます。なお、書画骨董品、古文書、経典、典籍、写本などを精力的に蒐集し、多芸かつ多趣味、しかも食道楽だった水木が亡くなった翌々日の大阪毎日新聞には「奇行逸話の生涯」と題された追悼記事が掲載されています。

参考文献 国立歴史民俗博物館編
「収集家100年・水木コレクションのすべて」同博物館発行、1998年

内田 忠賢（うちだ ただよし）
文学部人文社会科学文化メディア学コース教授（地理学、民俗学）

◆ 同窓会誌『佐保会報』から見える水木の姿



書の名手でもあった水木氏は、奈良女子高等師範学校・奈良女子大学同窓会誌『佐保会報』の揮毫も手掛けています。同誌には、水木氏の人となりや、歴代の学生・卒業生との深い関わりを偲ばせる記事が数多く寄せられており、第一期生記念号発行に際して水木氏が寄稿した「思ひ出一つ二つ」ⁱもそのひとつです。学芸会や修学旅行、弁論大会など、第一期生との思い出が事細かに書き記された紙面からは、創立当初より指導者として関わってきた奈良女子高等師範学校への思い入れのほどがうかがわれます。

退官後、自宅で療養生活を送るようになってからも、水木氏のもとを訪れる卒業生が途絶えることはありませんでした。師弟の対面を目の当たりにした人物は後に、水木氏に対する卒業生らの態度には、「恩師へといふよりも慈父寧ろ慈母に接せられるやうな温情有る眞味」ⁱⁱ がこもっていた、と振り返っています。大和の生き字引として知らぬものはないほどの大人物でありながら遊び心も持ちあわせた水木氏は、教え子をはじめ多くの人々に慕われ、その記憶に残り続けまし

た。ある卒業生の方は、水木氏との思い出をこのように語っています。

「私が一年生の時丁度二月廿五日の朝、一葉の葉書がまひこみました。高足の膳に鯛の焼物をすえた戯画の上に『御誕生を祝ひまつる』とも子。と記されてあり消印を見ると奈良にて、不審におもひ乍ら、このやさしい葉書を見ますと妙に故郷なつかしく涙ぐましい思ひが致しました。その後旅行の途次にてあれは先生がお書き下つたもので、生徒皆々次々に誕日に出そうと思つたが果さなかつたとお笑ひになりつゝ、承りました。」ⁱⁱⁱ

- i 昭和3年6月25日 第17号第1回 第一期生記念号
佐保会報復刻版第一巻p.1 十五堂「思ひ出一つ二つ」
- ii 昭和13年6月30日 第27号6月号
佐保会報復刻版第一巻p.390-391 竹盧 諸井國吉「十五堂先生追慕記」
- iii 昭和13年6月30日 第27号6月号
佐保会報復刻版第一巻p.392 鈴木きよ「水木先生を偲びまつりて」

高田 桃子（たかだ ももこ）
文学部言語文化学科ヨーロッパ・アメリカ言語文化学コース4回生
出身校：奈良女子大学附属中等教育学校



編集・発行/奈良女子大学広報企画室 編集責任者/室長 小路田泰直 連絡先/奈良女子大学総務・企画課
〒630-8506 奈良市北魚屋東町 Tel 0742(20)3220 Fax 0742(20)3205 E-mail somu02@jimu.nara-wu.ac.jp
"ならじよToday"へのご意見・ご感想を是非お聞かせ下さい。より良い誌面作成のため皆様の叱咤激励をお待ちしています。（編集部）

・バックナンバーはHPをご覧ください。▶ <http://www.nara-wu.ac.jp/nwu/intro/today/index.html>